OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 鎮魂の花火の民俗学 |
| Author(s) | 丸山, 泰明 |
| Citation | 日本学報. 2016, 35, p. 25-45 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/55502 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 鎮魂の花火の民俗学

丸　山　泰　明

## はじめに

2011年３月11日に起こったマグニチュード9.0の地震によって生じた東日本大震災では、建築物の倒壊と海から押し寄せてきた津波により、１万6000人近くが死亡し、2500人あまりが行方不明となった。

震災ののち、東北の各地では、震災の犠牲者を鎮魂する花火が打ち上げられた。もっとも大規模なものは、LIGHT UP NOPPONという団体が企画した花火大会で、第１回は月命日である2011年８月11日に、東北の10か所で作曲家坂本龍一が演奏する「赤とんぼ」にあわせて花火が打ち上げられた。以来、現在まで５回つづいている。『読売新聞』2012年８月12日付の記事によると、震災翌年の2012年８月11日の第２回の際は、東北地方の沿岸12市町村と、福島第一原発周辺からの避難者が多い福島県会津美里町の海上で打ち上げられ、第１回より１万発多い３万発の花火が打ち上げられた。岩手県大槌町の会場では、店舗が津波で流され仮設店舗で営業する女性が「津波で亡くなった親戚や友人を思い出した。月命日、私たちに代わって花火を上げてくれてありがたい」と涙ぐんだ。また福島県南相馬市の会場では、津波により親類５人を亡くした63歳の男性が「震災を忘れないため、花火を見に来た。亡くなった人たちの顔を思い出した」と語って空を見上げたという。この他にも、特別に企画されたイベントや、あるいは年中行事として毎年行われている花火大会で、震災の犠牲者を弔う花火が打ち上げられた。

死者の鎮魂のために花火を打ち上げることは、東日本大震災を契機に始まったのではなく以前から行われていた民俗文化のひとつである。観光イベントとしての花火大会にだけ接してきた都市の人々は、打ち上げ花火はただ鑑賞して楽しむものとみなしているかもしれない。しかし地方の花火大会では、しばしば自分たちで花火を打ち上げるお金を出して、花火に自分の願いを託すことが行われる。その願いは、長寿の祝いや子供・孫の誕生の祝福、42歳の厄払い、そして死者の鎮魂などさまざまである。これらの花火に願いを託す民俗文化を土台として、東日本大震災に際して、犠牲者を鎮魂する花火が夜空に打ち上がったのである。

本稿は、死者を鎮魂する花火について各種の事例を取り上げ、その特徴を考察しようとするものである。

花火は、日本人にたいへん親しまれている文化の一つである。空に花火玉を打ち上げて大きな花を咲かせる花火大会が毎年全国各地で催されている。川開きの水神祭や、神社の祭の奉納物として打ち上げられる伝統的なものから、大都市や観光地で催されるイベントまで各種の催しが多数存在する。特に夏の花火大会は、納涼の年中行事として欠かせない夏の風物詩である。打ち上げ花火の一方で、子供が遊ぶ玩具花火がある。手持ち花火や線香花火をはじめとして数えきれないほど豊富な種類が販売されている。また男の子たちは、ロケット花火や爆竹で、爆発によって生じるスピードや音を、手軽に驚きとスリルを体験できるものとして楽しんでいる。

花火は日本人の生活のなかに深く根づいている文化だが、それに対して学術的な研究は非常に少ないのが現状である。これまで出版されてきた花火についての書物のほとんどが、花火師などの花火関係者や花火の愛好者によって書かれたものである。もちろん、これらの書物も花火について論じるためには非常に重要であり、花火の基本的な知識から専門家や愛好者による独自の視点による鑑賞方法や楽しみ方など多くのことを学ぶことができる。ただし、これらの書物の主要なテーマは花火の美しさを語ることにある。日本人の生活に結び付いた花火の歴史や、花火をめぐる日本人の心性について客観的な観点から花火を考察するものではなかった。

学術的な研究のうち歴史的な研究については、奥田敦子[1)]や福澤徹三[2)]のものがある。奥田は文献資料に加えて浮世絵などの図像資料から、花火の技術発展史や花火師の歴史をたどっている。奥田の研究が主に花火の技術や花火の作り手について焦点を合わせた研究であるのに対して、福澤は、花火を楽しむ受け手に焦点を合わせた研究である。江戸幕府による町触れなどの花火取締政策が花火を編成していった過程を問い、打ち上げ場所が隅田川（大川）に集約されていき、花火を見て楽しむ大人と手遊びする子供というように、大人と子供で異なる楽しみ方になっていった過程を明らかにしている。本稿ではこれらの研究を参考にしつつ、民俗学の観点から、花火をめぐる伝承や年中行事、現代における花火を題材とした大衆文化を取り上げ、鎮魂の花火について考察することにしたい。

なぜ、花火が死者の鎮魂となるのだろうか。一つの答えとして、闇夜の空に打ちあがり、一瞬のうちに光と音を発して美しく輝きすぐに消えていく姿に、日本人の無常観を重ね合わせるからだ、と説明することができるだろう。鴨長明が『方丈記』のはじまりで「ゆく河のながれは、絶えずして、しかももとの水にあらず。澱に浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しく留まりたるためしなし」[3)]と述べたことは、あまりにも有名である。世は川の流れのように常に移り変わり、人は水の泡のごとく夕べに生まれては朝に死に、どこ

からか来てどこからへと去っていく。そんな人間の一生を、一瞬のまたたきと共に消えていく花火にかいま見てしまうからこそ、日本人は花火を見るとはかなさや切なさを感じ、死者を想うのかもしれない。

あるいは、花火は川や海、山で打ち上げられることから、花火が死者の鎮魂と結びつく理由を日本人の他界観をふまえつつ説明することもできるだろう。民俗学の研究成果によれば、日本人は川や海、山を他界としてとらえ、死後に霊魂が行き神霊がすまう世界としてきた。もっとも、技術的および法律的な点から指摘すれば、花火が川や海、山で打ち上げられるのは、人家があるところを避けた安全上の配慮の結果に過ぎない。花火は人を殺傷することもできる威力を持つ危険な爆発物であり、また火の粉がふりかかって火災が生じるおそれもあるので、人家から離れた場所で打ち上げられてきた。現代では各都道府県が保安距離を定めており、その範囲内で打ち上げることができる花火の大きさが決まっている。花火を打ち上げるためには一般の人が立ち入ることができず人家も存在しない保安距離を設定する必要があるため、必然的に打ち上げ場所が何もない川や海・山になってしまうのである。とはいえ、花火を見る者が、川や海・山で打ち上げられる花火を見るときに、他界にすまう死者を想う可能性を否定することもできないだろう。

花火は江戸時代の初めに海外から日本に移入されたことが歴史的資料から明らかだが、当初は新しい軍事技術のひとつに過ぎなかった。それが、日本に広まり定着していくなかで、鎮魂という宗教的・民俗的意味が付与されて行ったのである。なぜ、花火が鎮魂となるのか。先に述べたように、無常観や他界観に根ざす日本人の死生観があるのかもしれない。また、花火という言葉を分解すると花と火になるが、死者に花を手向けたり、火を神聖視して送り火や迎え火のように死者の弔いに火を用いたりしてきた風習が影響を与えてきたのかもしれない。

とはいえ、本稿では、自らの立論に都合のいい民俗文化を持ち寄りつぎはぎして短絡的に結論づけてしまうのではなく、資料にもとづきながら検討する姿勢を選ぶことにする。花火は日本で行われるようになってからまだ500年ほどの時間しかたっておらず、古代からつづく民俗と比べれば、比較的新しい民俗といえる。外国から持ち込まれた花火が日本に定着し、素朴なものから巨大な打ち上げ花火へと発達していった過程をたどりながら、鎮魂の花火の諸相を見ていくことにしよう。そこで、やや大づかみな議論になるかもしれないが、花火と鎮魂という問題設定が用意する地平をより広くとらえるために、江戸時代から現代まで､年中行事から小説･テレビアニメまでを取り上げて検討することにしたい。なお、今日は火薬を燃焼させて生じる光や煙・音を楽しむ鑑賞物の名称としては「花火」が一般的であるが、歴史的には「煙火」と呼ぶ例もあり、近代以降法律用語でも煙火と呼称している。したがって、本文中には「花火」と「煙火」の呼称が混在していることをあ

らかじめ断っておく。

## 1．近世における花火の普及

いつ頃から花火に鎮魂の意味が与えられたのかは、はっきりしない。多少、花火についての知識がある者は、両国の川開きの花火のはじまりを説く起源譚を引用して説明するかもしれない。今日、東京の人々に夏の風物詩として親しまれている隅田川花火大会は、江戸時代に行われていた両国の川開きの花火の系譜を引いているが、そのはじまりは1733年（享保18年）に、飢饉とコレラによる死者の慰霊と悪疫退散のために花火を打ち上げたことだとされている。このことから、18世紀前半には、鎮魂の意味が与えられていたと言う人もいるかもしれない。しかしながらすでに先行研究によって指摘されているように、この起源譚は史実かどうか定かではない。この起源譚については後にあらためて検討するとして、まずは日本に花火が持ち込まれ、近世に隅田川にかかる両国橋近辺が武士・庶民を問わず人々が花火を楽しむ場になっていった歴史をたどっておくことにしよう。

火薬が発明されたのは中国の唐代においてだとされている。火薬は、木炭・硫黄・硝酸カリウムを混合したものである。火薬に火をつけると生じる爆発力を人類は軍事に活用していった。日本人がはじめて火薬の力に接したのは13世紀後半の元寇のときである。竹崎季長の戦いの姿を描いた『蒙古襲来絵詞』に「てつはう」が炸裂する場面があることは有名である（この場面については後世の加筆とする説もある）。

ついで16世紀半ばに、火薬を用いた武器である鉄砲がヨーロッパから日本にもたらされた（通説では1543年に種子島に鉄砲が伝来したとされる）。以降、戦国時代という時代状況のなかで鉄砲が国内で大量に生産されたことにともない、火薬も増産された。また火薬は、情報伝達のための狼煙にも用いられた。戦国時代を通じて日本人は火薬を生産し取り扱う技術を身につけていった。

戦国時代が終焉し平和な世になってくると、火薬は軍事にではなく、見て楽しむ花火に用いられるようになっていく。花火の存在を確認できるもっとも早い事例は、徳川家康が見た花火である。徳川家康についての事績をまとめた「台徳院御実紀巻23」（『徳川実紀』）によれば、1613年８月２日に、ヨーロッパ人と共に駿府に着いた中国人が翌三日に家康に拝謁した際に、家康に花火の技を見せるようにいわれたとある。６日の箇所には「駿府二丸にて唐商烟火の戯御覧ぜらる。義直。頼宣両卿。頼房朝臣も陪し給ふ。」[4]とあり、駿府城二の丸で家康が、それぞれ尾張・紀州・水戸藩御三家の家祖となった息子たちと花火を鑑賞したことが記録に残されている。このときの花火は、烟火、すなわち煙の火と呼称されている。このときの花火は、花火の技術発展史の観点から、今日のような打ち上げ花火ではなく、筒に詰めた火薬に火をつけて、筒から吹き出す火花を楽しむ立て花火だっ

たとされている。

このとき以降、花火は将軍家や大名家にひろまっていき、余興として打ち上げられるようになった。また庶民のあいだにも娯楽としての花火が普及していった。庶民への花火の広まりは、江戸の町が火事で燃えることを恐れる幕府が取り締まるところとなる。1648年６月27日には「一、町中にて鼠火りうせい其外花火之類仕間敷事」[5]という禁制を幕府は出している。鼠火は、火薬が爆発する勢いで地面を走る花火だが、今日の鼠花火のように地面をくるくる回るのではなく、一直線に進むものだった。りうせいは「流星」という漢字があてられることもある空に打ち上げられる花火である。江戸時代を通じて、幕府は市中での花火を禁じる禁令を繰り返し出しており、逆の見方をすれば庶民は市中で花火遊びに興じていた姿が見えてくる。

幕府は市中での花火は取り締まったが、大川、すなわち隅田川にの河口に限っては許可した。特に両国橋の近辺には花火を見る者を客とする水茶屋や料理屋が建ち並んだ。両国橋とは、1657年の明暦の大火の際に避難民が当時橋がなかった大川に追いつめられ多くが焼死・溺死したことからかけられた橋であり、隅田川をまたいで武蔵野国と下総国をつないでいることから名づけられた。

花火師として有名な鍵屋の初代弥平兵衛が江戸に出てきたのもこの頃である。1659年に大和国篠原から江戸に出てきて鍵屋を構えた。1810年には鍵屋の手代清七がのれん分けをして玉屋を構える。ただし玉屋は、1843年に失火により江戸払いとなってしまった。

花火が普及するにつれて技術が改良され、大型化していった。地面に立てた筒から火花が出る立て花火からはじまって、手に持った筒から火花が出る吹き出し花火や、葦の管に入れた小さな火薬の玉が飛び出す打ち出し花火、棒の先に火薬を詰めた筒を取り付けて噴射する流星、そして打ち上げ花火と発展していった。

両国橋の周辺は夏の夕涼みとして舟遊びをする歓楽の場として、夏になると花火遊びが行われた。その様子を戸田茂睡は、1682年に刊行した『紫の一本』で次のように書いている。

> 花火船をば呼かけて、一艘切りにてたてさする、しだれ柳に大桜、天下泰平文字うつり、流星玉火にぼたんや蝶や葡萄に車火や、是は仕出しの大からくり、てうちん立傘御覧ぜよ火うつりのあぢはひは仕つたり天下一、あつちゃああつちゃあとほむるもあり、北も南も西東、爰かしこにてたてあぐれば、ただ日中の如くなるに、火玉の出る筒音、流星のあがる響き、人のわめく声にて、心静かに漕ぐ船なし[6]。

この文章を読んでいると、大川に数多くの船が浮かび、筒から飛び出す花火や、天下泰

平といった文字を火花でつくる仕掛け花火などの各種の花火が盛んに遊ばれ、人々がにぎやかに楽しんでいたことがわかる。

大川での花火は、５月28日の川開きのからと決まっていた。江戸時代後期に書かれた喜多川守貞の『守貞謾稿』には「五月廿八日浅草川川開　今夜初テ両国橋ノ南辺ニ於テ花火ヲ上ルナリ　諸人見物」[7]とある。このときに花火をあげる慣習が今日まで受け継がれてきた。高度経済成長期の1962年に隅田川の水質汚染と住宅の密集により中止となるが、水質が改善されてきたことから1978年に会場を少し上流の桜橋・言問橋間と駒形橋・厩橋間の二箇所に移し、名称も「隅田川花火大会」とあらためて現在に至っている。

さて、ここで本節の冒頭で述べた、両国の川開きの花火をめぐる起源譚について検討したい。花火師の小勝郷右による『花火――火の芸術』（岩波新書、1983年）には次のようにある。

> 両国大川の川開きで花火が打ち上げられるようになったのは、享保18年（1733）５月28日からだという。前年の享保17年には関西を中心として全国的な大飢饉に襲われ、加えて江戸では伝染病のコロリ（コレラ）が流行して多くの死者を出した。８代将軍の徳川吉宗が死者の霊をなぐさめ悪疫退散を祈って、両国大川の水神祭を催した。これに大川沿いに店を張る水茶屋、料亭が協力して川施餓鬼を行なったが、この日に大花火を打ち上げたことから、川開きに花火を打ち上げる習慣が生まれたといわれる[8]。

この話は、今日隅田川花火大会の始まりを説明する際に必ず引用される話である。また花火と死者慰霊の関係を説明する際にも必ずといっていいほど持ち出される。ただし、先にも述べたように、史実であるかどうかは定かではない。管見の限りでこの話が出てくる早い例は、『読売新聞』1953年７月10日付夕刊に掲載されている「両国の川開き　享保十七年、幕府の供養がはじめ　花火師玉屋、鍵屋が腕を競う」という見出しの、柳橋組合長の稲垣平十郎が両国の花火の歴史を語る記事であり、先に引用した小勝ほぼ同じ構造である。

この話の構造を、①1733年（もしくは1732年）の徳川吉宗の治世に、②飢饉とコレラにより人々が死亡したことから、５月28日の川開きの時に幕府が水神祭を催すとともに隅田川沿いの水茶屋・料亭が川施餓鬼を行い、花火を打ち上げ、両国川開きの花火の始まりとなった、と整理することができる。川開きとは川辺や船で納涼したり泳いだりすることができるようになる日のことであり、この日に川で遊ぶことを祝い水難防止を祈願するために水神祭を行う。川施餓鬼とは、水死者の霊を弔う行事であり、施餓鬼法要ののち、

水死者の法名を書いた経木や灯籠・供物などを川に流す。単なる慰霊にとどまらず、納涼や娯楽の要素が強くなっていったものもある。

この話を資料から確認することにしよう。まず①について、徳川吉宗の事跡を幕府が編纂した「有徳院殿御実紀」（『徳川実紀』）を調べてみると、1733年５月28日の箇所はもとより、その前後も含めて吉宗が死者慰霊と悪疫退散のために水神祭を催し、この日に花火を打ち上げたという記述を見つけることはできなかった。

次に②の飢饉とコレラの流行に関しては、斎藤月岑がまとめた『武江年表』の記述が参考となる。『武江年表』は市井の事柄が細かく記されている年表であり、江戸の都市風俗について調べる際の基本的文献だが、こちらには1733年の箇所に疫病が流行したという記述がある。「七月上旬より疫癘天下に行はる。十三日・十四日、大路往来絶へたり。藁にて疫神の形を造り、これを送るとて鉦・太鼓をならし、はやしつれて海辺に至る」[9]とある。藁で人形をつくり鉦などを叩いてはやしたてながら海に流すのは、疫病などの災厄を自分たちが暮らす共同体の外部に追い払うために行われた民俗的な儀礼である。また前年の1732年の箇所には、「天下飢饉、疫癘行る」[10]とあるから、この年に飢饉に襲われ、また２年続けて疫病が流行り、多くの人々が死んだことは事実と見ていいだろう。ただし、水神祭と川施餓鬼が催され花火が打ち上げられたとは斎藤月岑は記していない[11]。

以上のように資料からは実際に行われたのか確認することができない。だが、民俗学の観点からするならば、史実か否かよりも、両国の花火の起源を語る「神話」として広まっていることに着目すべきなのかもしれない。この起源譚は、今日でも隅田川花火大会の起源を語る際に必ず言及される話であり、また、なぜ花火が死者の慰霊になるのかを語る際にも、両国の川開きの花火が「先例」として持ち出される。徳川吉宗という民を慈愛するする名君と、死者の鎮魂と災厄を川に流すという民俗的な他界観・死生観が組み合わさっており、両国の川開きの花火の起源を語る神話としては、ひらたくいえば「民俗学的によく出来た」ストーリーとなっている。

なお、隅田川で、死者のために花火を打ち上げる例が全くなかったわけではない。明治に入ってからの事例になってしまうが、『読売新聞』1888年７月６日付には、東京向島の名物として知られる言問団子の主人の外山新七が来る７月21日に亡父三回忌の追福を営むため、午後６時より花火数百本を打上げ、かつ例年通り隅田川にて水死した者の追善のため同夜より数日間灯籠流しを執行することになっているという記事が掲載されている。

地方の民俗的な行事でも、死者慰霊のための花火として今日伝えられているものがある。たとえば、和歌山県熊野市の海岸で例年８月17日に開催される熊野大花火大会は、藩政時代に極楽寺で行われた初精霊供養の松引き行事の柱松の花火に由来するとされる。また、福島県浅川町で例年８月16日開催されている浅川の花火は、1798年に起こった農民一揆

である浅川騒動の犠牲者を慰霊するために行われるようになったと伝えられている。

江戸時代初期に日本に伝わり将軍･大名から庶民に至るまで広く楽しまれていた花火に、江戸時代後期になると死者を慰霊する意味が込められていったと推定できるのではないだろうか。この推定を説得力のあるより確かなものにしていくためには、江戸時代の文献資料や各地の行事の伝承をさらに詳しく調査していく必要があるだろう。

## ２．近代における戦死者の鎮魂と花火

明治になると日本は産業・工業・軍事などの各種の分野で、ヨーロッパの先進的な技術を取り入れるようになる。花火の世界も例外ではない。それまでの木炭・硫黄・硝酸カリウムによる黒色火薬の花火は燃焼温度が1700度足らずで、色も赤橙色だった。それが1879年頃に輸入された塩素酸カリウムを花火に使うことによって燃焼温度が2000度以上になり、色が鮮やかに出るようになった。また、化学薬品を火薬に混ぜることにより、より各種の色を出せるようになった。たとえば､硝酸バリウムを加えることによって緑色を、炭酸ストロンチウムを加えることによって深紅の色を出せるようになった。明治の文明開化以降のより鮮やかで多様な色ができるようになった花火を「洋火」といい、それに対して江戸時代までの伝統的な花火を「和火」というようになる[12)]。

近代になると花火は、その光と爆発音により祝祭性を演出するものとして、イベントの際に打ち上げられるようになる。1889年に大日本帝國憲法が発布された時も、皇居の二重橋から花火が打ち上げられている。

近代において日本は陸軍と海軍をつくり、諸外国と戦争を行ったが、花火はまた戦争の際にも活用された。出征兵士の見送りや、戦勝祈願、そして遺骨を出迎える時や、慰霊祭などで打ち上げられた[13)]。本節では、近代における鎮魂の花火として、①靖国神社・護国神社の招魂社系の祭における花火、②海軍航空隊の殉職者慰霊の花火、③戦災からの復興と空襲犠牲者の慰霊のための長岡まつり花火大会を取り上げて論じることにしたい。

### ２－１．軍人の顕彰と花火――靖国神社・護国神社をめぐって

1853年のペリーの来航をきっかけとして起こった日本国内の動乱は、やがて薩摩藩と長州藩を中心とする倒幕運動に至る。徳川慶喜は1867年10月14日に大政奉還を行ない、政権を天皇に返上するが、薩摩藩・長州藩との対立は激化し、1868年１月３日には新政府軍と幕府軍のあいだで鳥羽・伏見の戦いが開戦する。翌４日には、朝廷が錦旗を与えたことにより新政府軍は官軍となる。戦闘の最中、大阪城にいた徳川慶喜が江戸に逃げ帰ってしまうという事態も起き、幕府軍は敗北する。新政府は７日に徳川慶喜追討令を発し、熾仁親王を東征大総督に任じて江戸へと進軍するが、新政府と徳川家のあいだの交渉の結

果、徳川慶喜は水戸へ退去し４月に江戸城は無血開城された。新政府軍による江戸城総攻撃は回避されたが、新政府軍と旧幕府側の立場にたつ諸藩のあいだで戦端が開かれ北関東・奥羽・越後の各地で激戦が繰り広げられていた。これらの戦いは後に戊辰戦争と総称されることになる。

戊辰戦争の最中の５月10日、太政官は「伏見以来ノ戦死者ノ霊を東山ニ祭祀ノ件」を布告する。すなわち１月４日に始まった鳥羽伏見以来の戦死者を京都の東山にて祭祀するというものである。ここでの戦死者とは、官軍の戦死者のことであり、旧幕府側の戦死者は含まれていない。同日には、「癸丑以来殉難者ノ霊ヲ東山ニ祭祀ノ件」も布告された。癸丑とはペリーが来航した1853年のことで、この年以来国事に奔走してたおれた志士を、こちらも京都の東山にて祭祀することを布告したものである。この二つの布告を受けて京都の東山のみならず各藩でも戦死者や維新の志士を埋葬した墳墓や記念する碑のもとに招魂社を創建するようになった。これらの招魂社が後に各地の護国神社となっていった。布告が出た翌年の1869年６月29日に、東京の九段坂上に東京招魂社が創建され、戊辰戦争における官軍の戦死者を祀った。この神社が1879年に改称し、靖国神社となった。

東京招魂社では、創建翌年の1870年に、５月14日から５月18日まで祭が催されている。1868年５月15日の上野の彰義隊の潰走と、1869年５月18日の箱館の五稜郭の開城を記念したものである。このときの祭で、花火が打ち上げられている。斎藤月岑『武江年表』には、次のように記録さている。「同月（1870年５月）十四日より招魂社祭礼、御執行あり。（社は四町計西の方へ引る。未仮建なり。同五年御造営あり。此日間、貴賤群集す。十四日太々神楽・十五日祝砲・十六日昼夜花火・十七日同断・十八日相撲、夜花火の処、雨降る。此辺町々飾り物あり。九段坂上御堀端通、水茶屋出来しが、後御取払に成る）」[14]。５月14日から18日までに行われた祭において、太々神楽・祝砲・相撲という新旧入り混じる催しが行われたなかで16・17日の昼夜と18日の夜に花火が打ち上げられた。以降、東京招魂社（靖国神社）の例大祭の際に花火を打ち上げることは恒例となり、神社と近衛師団（現在の北の丸公園）の間にある牛ヶ淵で花火が打ち上げられた。また、明治時代初期には外苑でも仕掛け花火が設けられた。戦前において、靖国神社の例大祭における花火は恒例の年中行事として東京市民に親しまれた。花火は、戦後市街地の密集化により安全に配慮して取りやめになるまでつづいた。

靖国神社や各地の護国神社などの招魂社系の戦死者慰霊の特徴は、祭神となった戦死者に対して祈るだけではなく、その周囲では芸能や見世物といった賑やかでときに猥雑な出し物が上演される空間が用意されていることである。祭は、静かに祈るだけではなく、遊興・歓楽のときでもあった。靖国神社における祭の光景として、花火は欠かせないものだった。

花火が打ち上げられたのは東京招魂社（靖国神社）だけではない。地方の招魂社や招魂祭でも花火が打ち上げられた。たとえば、1878年に９月23・24日の二日に神奈川県横浜にある伊勢山で催された花火の様子を『読売新聞』1878年９月25日付の記事から見てみることにしよう。「朝八時に上ッた狼煙ハ雨中雪、白菊それより午後にハ黄真菊、にはとり、白煙柳が上り四時からハ雪笠、紳士、黒雲、十字、子持龍、手遊物、白雲、群鷺、五彩雲、狐拳、寒山、落葉其外四五種と打あげ夜るハ源氏車、牡丹、狂ひ獅子ほか数十本をあげ（花火の代ばかりも三百円余といふ）」とある。「紳士」という名前の花火といった、どのような花火なのかもはや想像できないものも含めて、昼夜を通して各種多様な花火が打ち上げられていたことがわかる。このときの招魂祭は、戦死者の記念碑の両側に桟敷席を設け、鳥居には戦争の図と伊勢山の風景を描いた大灯籠をかけ、周囲には数十の灯籠をかけ数百という提灯を吊るして明るく照らし出していた。町内からは囃子屋台や練り物が出る盛況なものであり、東京からは華族たちが訪れ、一般の人々も多数が来集したという。

今日でも地方の護国神社の中には、例大祭の時に花火を上げているところがある。靖国神社や各地の護国神社などの招魂社系の祭における花火は、余興や祝祭性の演出として始められたものだが、戦死者を顕彰する各神社における祭の光景として人々に親しまれていた。日本文化における花火と鎮魂の関係を論じるためには見落とすことができないものである。

### ２－２．海軍航空隊殉職者と花火――土浦全国花火競技大会のはじまり

今日一般に日本三大花火大会と称される花火大会がある。茨城県土浦市の土浦全国花火競技大会、秋田県大曲市の全国花火競技大会・大曲の花火、新潟県長岡市の長岡まつり大花火大会である。このうち、土浦全国花火競技大会と全国花火競技大会・大曲の花火はその名称が示す通り全国の花火師たちが自らの技芸を競い合う大会だが、土浦の花火大会は、もともとは土浦町の近くに所在する霞ヶ浦海軍航空隊の殉職者を慰霊するために始まったものである。1925年に茨城県土浦町（現土浦市）出身で同町にある神龍寺住職の秋元梅峯の主唱により、霞ヶ浦海軍航空隊の殉職者の慰霊と関東大震災により停滞した商店街の復興のために花火を打ち上げられた。この花火が、日本三大花火大会の一つに数えられるまでに規模が拡大し、今日に至っているのである。

最初に花火を打ち上げた秋元は、土浦中学校卒業したのちに曹洞宗高等学校を卒業して神龍寺の住職となった人物である。日露戦争の際には出征し、戦後は戦死者のために追悼会を催し忠魂塔を建て、遺族の慰安救済にたずさわった。1917年には、それ以前に組織していた土浦仏教団・仏教青年会および婦人会を併合し大日本仏教護国団を結成し、自ら団長となって社会福祉に尽くした。1923年９月１日に起こった関東大震災の際は、東京

からの避難民に寺院を解放して宿舎としている。地主と小作農たちが対立する小作争議の調停にも取り組んだ[15]。

秋元が殉職者の慰霊の花火を打ち上げた背景には、霞ヶ浦海軍航空隊における飛行機の訓練・教育において、毎年死亡事故が起こり、殉職者が多数出ていたことがある。霞ヶ浦海軍航空隊は、三番目の海軍航空隊として、土浦の近くにある現・茨城県阿見町の霞ヶ浦湖畔に設置された。まだまだ飛行機の整備や操作の技術が不十分だったため、開隊から数年あまりで20数名が殉職していた。秋元が花火を打ち上げた1925年に、霞ヶ浦海軍航空隊の教頭兼副長であった山本五十六が殉職者を祀る神社の創建を発案し、翌1926年には霞ヶ浦海軍航空隊もふくめた海軍すべての航空殉職者を祭神として祀る霞ヶ浦神社が創建されている[16]。秋元は近くにある霞ヶ浦海軍航空隊で多数の住職者が出ていることに身近に接して、それまで戦死者の追悼と遺族の救済にたずさわっていたことから、海軍航空隊の殉職者のための花火を打ち上げたのである。

1925年の第１回は秋元が個人で打ち上げたが、1926年の第２回から1932年の第７回までは秋元が団長を務める大日本仏教護国団が主催した。その後、土浦煙火協会に主催が移り、全日本煙火競技大会として花火師が独自の花火を打ち上げて腕を競い合うようになる。戦後は花火師たちの全国団体である日本煙火協会が主催し、土浦全国花火競技大会となって現在に至る。

戦前の花火大会の様子について、土浦尋常高等小学校が郷土教育のための手引きとして作成した『土浦郷土読本』の記述を見ていくことにしよう。刊行されたのが1940年だから1930年代後半頃の情景が描かれていると推定できる。花火大会は10月中旬の二日にわたって行われ、すでにこの頃には臨時列車も増発されて10万もの人が押しよせる大会となっていた。花火は朝から打ち上げはじめられ、夜は電気仕掛けで花火が次々と打ち上がって林立した。赤・黄・紫・緑と万華鏡のように繰り広げられる花火を、人々は船や陸・橋から仰ぎ見た。時局柄、仕掛花火は戦争にちなんだ爆弾三勇士のものだった。爆弾三勇士とは、1932年の第一次上海事変で破壊筒を持って敵陣に突入し戦死した三人を讃えた呼び名である。当時は映画や演劇・軍歌などの各種の大衆文化の題材となって流行していた。花火大会の爆弾三勇士の演出は次のようなものである。「ポン、ポン、ポンと闇に響く機関銃の音、爆弾の炸裂する響、やがて煙火の山の頂上に日章旗が高く高く掲げられるといふやうな光景は何と言っても他に見られない壮観です」[17]。花火が発する光と煙・音は、戦場を演出するには最も効果的な道具であろう。1930年代の段階では、土浦の花火大会の例のように、全国各地の花火大会で花火が戦場の演出に使われていた。

## ２－３．空襲とシベリア抑留――長岡まつり大花火大会をめぐって

日本三大花火大会と称される花火大会のうち、土浦全国花火競技大会は霞ヶ浦海軍航空隊の殉職者の鎮魂をはじまりとするが、残り二つのうちのひとつである長岡まつり大花火大会も、鎮魂にちなむものである。長岡まつり大花火大会は、長岡空襲からの復興と犠牲者の慰霊のためにはじめられた。土浦全国花火競技大会が、そのはじまりがほとんど忘れられ、花火師たちが競い合い観光客が集まるイベントとなっているのに対し、長岡まつり大花火大会は、戦後70年を経た今日でも、戦争の記憶を強く保ちつづけている花火大会である。

終戦も間近に迫った1945年８月１日、長岡市は午後10時30分から翌２日午前0時10分までのあいだにアメリカ軍の爆撃機によって焼夷弾が投下された。空襲により、市街地の約８割が焼失し、1470人あまりが死亡した。なお、アメリカ軍はあくまでの戦略的な観点から新潟県第二の都市である長岡市を爆撃したが（新潟県最大の都市である新潟市は原爆投下の候補地であったため空襲の目標からはずされていた）、長岡市出身の海軍軍人である山本五十六が1941年12月８日にハワイの真珠湾を奇襲攻撃した際の連合艦隊司令長官であったため、その報復として爆撃されたという話が、市民のあいだで語られることもある。

空襲の翌年1946年８月１日に戦災一周年を記念して、犠牲者を慰霊し復興へむけて市民を勇気づけるために復興祭がひらかれた。1950年には長岡祭と改称し、その後、長岡まつりと名称を改めて現在に至る。

復興祭における花火の打ち上げは二年目の1947年からはじまるが、花火大会自体は明治初期から行われている。初めて花火が上げられたのは1877年か翌1878年と推測されている。きっかけは、長岡の南遊郭大島屋のつるという芸妓たちが、富豪の佐藤某につれられて見た現在の新潟県小千谷市にある片貝の花火のすばらしさに魅せられ、長生橋の下流であげはじめたことだという。その後、明治期には、遊郭主体でおよそ30年のあいだ花火大会がつづいた。1920年に長岡商工会議所と北越新報社・越佐新報社が中心となって長岡煙火協会が発足し、花火大会の主催が移る。花火大会は1937年に勃発した日中戦争の戦況を鑑みて1938年から中止となった。ただ、戦時下においても出征兵士や戦勝記念のための爆竹が売れて煙火店は忙しかったという[18]。

2015年現在、長岡まつりは、かつて空襲があった記念日である８月１日に前夜祭を行い、２・３日に花火大会を行うという日程になっている。長岡まつりは戦災からの復興と犠牲者の慰霊を記念する祭であるので、観光化した祭のように週末に合わせて毎年日程が変わることはない。８月１日には、長岡まつりとは別に、空襲を記念する各種行事が催される。早朝に平潟公園で戦災殉難者慰霊祭が、昌福寺で戦災殉難者墓前法要が執り行われる。平

潟公園は平潟神社に隣接する公園である。長岡空襲の際には平潟神社境内に防空壕があったため、市民が避難するために集まったが、焼夷弾の炎によって多くの人が焼死した。戦後、戦災殉難者慰霊塔が建てられている。昌福寺には戦災殉難者之墓が建てられており、身元が確認できなかった焼死者の遺体を無縁仏として埋葬している。午前中には市主催の平和祈念式典も催される。

夜の長岡まつり前夜祭では、市内を流れる柿川で灯籠流しが行われる。柿川は炎から逃げる市民が飛び込んだが、水面に浮かぶ焼夷弾の油による炎に焼かれ、多くの市民が焼け死んだ川である。その川面に現在わかっている死者の人数分の灯籠が流される。長岡駅前の大通りで大民謡流しや、和太鼓の上演、神輿慰霊渡御、悠久太鼓が行われ、前夜祭の盛り上がりは最高潮に達する。午後10時には終わり、まつりに集まった人たちも家路につき、喧騒は静まる。そしてアメリカ軍による空襲がはじまった午後10時30分に、「白菊」という花火が、空襲犠牲者の慰霊と、復興に尽力した人々への感謝の気持ちを込めて３発打ち上げられる。そして２日と３日の大花火大会においても、開始前の午後７時20分、まだ夜の帳が下り切る前のまだ夕暮れの明るさがほのかに残るなか、白菊が３発打ち上げられる。打ち上がる前には観客席に設けられたスピーカーを通して事前に情勢のアナウンスがあり、３発にはそれぞれ、長岡市からの戦災殉難者への慰霊の花火、ホノルル市からの戦災殉難者への慰霊の花火、そして長岡市とホノルル市からの世界平和への祈りの花火と伝えられた。長岡市とホノルル市は2012年に姉妹都市として締結し、以来平和記念交流事業をつづけている。2015年は戦後70周年ということもあり、長岡市とホノルル市がともに両国の戦災殉難者を慰霊する花火を打ち上げた[19]。

８月１日の空襲開始時の午後10時30分に打ち上げられ、そして２日と３日の大会開始前に打ち上げられる白菊という花火は、長岡まつりにおいて戦災からの復興と、空襲犠牲者の慰霊のシンボルとなっている花火である。この花火にはもう一つの死者慰霊の物語がある。それは、戦後から2002年まで花火大会を取り仕切り、花火の製造と打ち上げの演出をしてきた花火師・嘉瀬誠次のシベリア抑留で死んでいった戦友たちを慰霊する想いである[20]。

嘉瀬は、1922年に現在の長岡市にある花火師の家に生また。子供の時には火薬庫の火薬を盗み出しては爆発させて友人たちと遊び、火薬に親しんでいた。1942年に徴兵検査を受けて甲種合格となる。1943年に新発田の歩兵第158聯隊に入隊し、訓練を受けたのち戦地へ送られ、千島列島の松輪島の守備に従事した。終戦後はソ連軍によりシベリアに送られて抑留される。粗末な収容所の建物に収容され、食事は黒パンと少しばかりの豆が入ったスープという劣悪な環境の中で、カラマツの伐採や築港作業に従事した。ようやく引揚げることができた舞鶴に上陸し帰国したのは、1948年８月15日のことである。翌年の花

火大会から花火師としての仕事に再び取り組むようになる。正三尺玉の花火の打ち上げに成功したり、いまでは一般的となったナイアガラの花火を考え出したりした。

やがて海外でも請われて花火を上げるようになり、花火の世界では有名人になっていく。1989年に名古屋市で開催された世界デザイン会議に招待されてパネリストとして出席した嘉瀬は、「嘉瀬さんは海外でたくさん花火をあげていますが、自分が一番上げたい国はどこですか」という質問に対して「シベリア」と答える。その発言がきっかけとなり、NHKなどの協力も得て実行委員会が組織され、1990年７月17日にソビエト連邦（現ロシア）のハバロフスクのアムール川の河畔に30万人を集めて花火大会が催された。嘉瀬は一発ごとに「戦友たちよ、おれの花火が見えるか。お世話になった人たち、ありがとう」と念じた。

この花火大会の際に嘉瀬がつくった新しい花火が、白菊である。夜空に華を咲かせる打ち上げ花火には、花火玉のなかの星が光の尾を引きながらしだれる「菊」と、星がほとんどしだれずに開く「牡丹」がある。嘉瀬は、日本に還ることができず死んでいった戦友たちへ白菊という花を手向けたのである。

長岡まつり大花火大会で、白菊が打ち上げられるようになったのは2002年からである。その頃、慰霊の花火に立ち返ろうとする動きがあり、長岡まつり実行委員会が嘉瀬に相談したところ、嘉瀬は白菊を選んだ。以来、白菊は大花火大会で打ち上げられるようになった。

ここで、2015年８月１日の前夜祭における白菊の花火の打ち上げの様子について書くことにしたい。午後10時近くになると、駅前の会場で行われていた神輿の渡御も終わり、祭りに来ていた人たちは帰途につき、長岡の街は急に静かになる。信濃川にかかる長生橋に行ってみると、そこにはすでに人が集まりはじめていた。打ち上げの時には、100人ほどが集まっていた。三脚を設置してカメラで撮影しようとする人の姿も見かける。携帯電話を構えて撮影しようとする人も多い。

午後10時半、事前の放送などはないまま、橋の少し下流の信濃川西岸から花火が打ち上がり、白菊の花が夜空に開く。つづいて、二発目、三発目と白菊が、少し間を開けながら打ち上がる。花火が打ち上がった後も、ある中年の男性は、花火が打ち上がった方向に向かって手を合わせていた。死者の鎮魂と平和への祈りだろうかと思ったその時、車とバイクに乗った暴走族の一団がけたたましくクラクションを鳴り響かせて長生橋を駆け抜けていった。決して偶然ではなく、花火の打ち上げに狙いを合わせて走り抜けて行ったのだろう。暴走族の若者たちにとっては、空襲犠牲者の鎮魂の花火も、自分たちだけが盛り上がるための「祭」を演出してくれるものの一つに過ぎないのだ。暴走族の若者たちを不謹慎だと謗ることもできるだろう。だがその一方で、若者たちが戦火に脅かされるわけでも戦場に行かされるわけでもなく、青春を謳歌することができる平和な世の中を、むしろ肯

定すべきなのかもしれないとも感じた。

以上、戦争と花火の関わりについて、三つの事例を取り上げて検討してきた。同じ戦死者（殉職者）の鎮魂の花火でも、前二者と長岡まつり大花火大会では性質が異なることに注意を払う必要がある。招魂社系の花火や霞ヶ浦海軍航空隊の花火は戦争を肯定し国家に殉じた軍人を顕彰する性質が強い。それに対して長岡まつり大花火大会の花火は、戦争を忌避し平和を祈りつつ戦争の犠牲者を鎮魂する花火である。

火薬が燃焼することによって光と煙・音を発する花火は、戦場のイメージを演出する道具としても使われる。先に土浦の花火大会における爆弾三勇士の仕掛け花火の例を見てきた。だとすれば、戦争の記憶を呼び起こしてしまうために、花火を遠ざける人がいてもおかしくはない。実際、長岡空襲により生後一歳半の女の子を失ったある女性は、「花火は嫌いなんですよ、あの日を思い出すから」と語っている[21]。戦死者を鎮魂する花火を論じるためには、単にひとまとめにしてとらえてしまうのではなく、それぞれの花火、それぞれの人々ごとの微細な事情や心情に目を向けていく姿勢が求められるだろう。

## ３．大衆文化における花火のイメージと死者への想い

これまでの考察では、年中行事やイベントにおける鎮魂の花火の事例について取り上げてきた。この節では視点を移し、花火と死者の鎮魂を描いた現代における大衆文化を取り上げて考察することにしたい。取り上げる作品は重松清の小説『その日の前に』と、アニメ『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』である。

### ３－1.『その日のまえに』

重松清の小説『その日のまえに』は、2005年に文芸春秋社より出版された短編小説集である[22]。書名にある「その日」とは、家族や友人などの親しい人が死ぬ日のことである。７篇の短編小説により構成され、最後にそれぞれにストーリーがつながっていくという構成になっている。７編のうち、後半の「その日の前に」「その日」「その日のあとで」が三部作となっている。イラストレーターとして活躍し、自分のほかにもデザイナーが所属する事務所を構え、私生活でも中学二年生と小学五年生の息子二人を持ち充実した日々を送っていた〈僕〉が、ガンにより余命を宣告された妻とともにかつて住んでいた街を訪ねる「その日のまえに」、妻を失う日までを描く「その日」、妻を失った後の「その日のあとで」で構成されている。この３篇を軸にして大林宣彦の監督により映画化された『その日のまえに』が2005年に公開された。またNHKによっても2014年テレビドラマ化され、前篇が３月23日に、後篇が３月30日に放送された。

映画およびテレビドラマも、「その日のまえに」「その日」「その日のあとに」がメイン

ストーリーとなっている。この三部作では、花火が物語を構成する重要な鍵となっている。

「その日」なかで、妻の和美の死がいよいよ間近に迫った時に〈僕〉が事務所に訪れると、スタッフから商店街が催すお盆の花火大会のポスター制作の仕事を依頼されたことをスタッフから聞かされる。〈僕〉の事務所はアメリカン・ポップを基調とするイラストを売りにしており、昔ながらの「お盆」や「花火」とはおよそ相容れない。また、広告会社を通してではなく、地域の商店街が直接に持ち込む仕事などもはや引き受けない存在になっていた。

断ろうとした時に、商店街の夜曲店の店主である石川から、コピーが送信されてくる。そのコピーを読んで、〈僕〉は石川と会うことにする。そのコピーには次のように書かれていた。「お盆の花火。それは大きな迎え火です。ふるさとを出て行ってしまったひと。会いたいくてもなかなか会えないひと。もっと遠くの世界に旅立ってしまって、もっと遠くの世界に旅立ってしまって、もう二度と会えないひと。……そんなひとたちをしのんで、夜空に大きな迎え火を焚きたいと思っています。どうぞ、たくさんの思い出を胸に、会場におこしください」。

花火をお盆に帰ってくる死者のための迎え火とすることは、民俗学ではほとんど言われることがない捉え方である。そのことは作者の重松清も承知しており、作中では〈僕〉の「花火がお盆の迎え日になるって、確かにそうだなあ、と思って（中略）地元のほうでは、花火にそういう謂れがあるんですか？」という問いかけに対して、ポスター制作を依頼した商店街薬局店の店主である石川が「いやいや、そうじゃないんですよ、もうアレです、俺のオリジナルで」と否定する会話のシーンがある。

石川は『その日のまえに』に収録されている別の短編「潮騒」の登場人物でもある。そこでは、ガンに余命三ヶ月を宣告された子供の頃の友人であるシュンが、小学生の時に引っ越して以来32年ぶりに訪ねてくる物語が語られる。「潮騒」から時は流れ、「その日のあとで」の時には、シュンはガンにより亡くなっていた。シュンの奥さんが訪ねてきたとき、遺骨が入ったトートバックにプリントされていたワンボックスカーでドライブする家族の絵が忘れられず、絵を描いたのが〈僕〉だったことから、花火のポスター制作を依頼したのだ。「初盆なんですよ、シュンの。初盆ってことは、あいつまだ初心者でしょ？　だから、よっぽど大きな迎え火を焚いてやらないと、帰ってこれないでしょ、なんて」と石川は洟をすすりながら語る。そんな石川の話を聞いた〈僕〉は、もう間もなく看取らなければならない妻を、花火大会の時には死者として迎えることを予期しつつ、花火大会のポスター制作を引き受けるのだ。

『その日のまえに』という作品のテーマの一つは、死者を忘れないこと／忘れることの相克である。妻の死から三か月後、〈僕〉は看護師を通して、妻からの手紙を受け取る。

手紙には「忘れてもいいよ」の一言だけが書かれていた。このシーンについて重松清は、かつて雑誌『女性自身』で「シリーズ人間」というヒューマンドキュメントのライターをやっていた際、ガンになった母親の話を描いたことがあり、母親がガンの闘病記に娘にあてて「ママのこと、ずっと忘れないでね」というメッセージを残したことにふれている。素晴らしいメッセージであると感じたと同時に、残された夫や子供にとっては重荷になると思った、という[23)]。

死んでしまったことによる喪失感、死者に対する後悔を抱きながら人は生きていく。だがいつまでも覚えているわけではなく、しだいに忘れていく時間が増えていく。忘れてしまったことに罪悪感とうしろめたさを覚えながらも、生きていかなければならない。〈僕〉は花火大会に息子二人と向かう電車のなかで「僕たちは、少しずつ、和美のことを忘れている時間を増やしていくだろう。和美のことを思い出さない期間が、少しずつ、長くなっていくだろう。もしかしたら、僕はいつか和美の思い出よりも大切にしたいと願う女性に巡り合うかもしれない。だが、和美が消え去ってしまうことは、絶対にない」と心の内で思う。

そして小説は三人で花火大会のシーンを描きながら「夜空に描き出された花びらは、すうっと、涙が流れるように垂れて、消える。闇に戻った空には、目には映らない花の影がしばらく残っていた。」という文章で結ばれる。花火というと鮮やかな光と大きな音にばかり注目してしまうが、それはひと時のものであり、すぐに辺りは闇夜と静寂につつまれる。そのような性質を持つ花火と、死者を思い出し、忘れてしまうが忘れてしまいたくはない心情を重ね合わせて小説は閉じられている。

### ３－２．『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』

『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』は2011年４月から６月にかけてフジテレビにて全11話がテレビ放送されたアニメである。2013年８月に『劇場版　あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない』が公開され、アニメで放映された物語世界から一年後の後日譚が描かれている。ここではテレビ放送されたストーリーについて考察する。

近年のアニメでは、製作スケジュールが過密になった影響により、実際の街を舞台としてその町の風景の写真をトレースして背景を描くという手法がしばしばとられる。また、アニメのファンは「聖地巡礼」と称してアニメの舞台となった場所を訪れる。『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』の場合も同様で、埼玉県秩父市が舞台となっている。そして、同市で毎年10月第２週の日曜日に催される椋鳥神社例大祭において奉納される龍勢祭りで打ち上げられる花火・龍勢がストーリーを構成するカギとなっている。

『その日のまえに』が、家族や友人といった親しい人を失って間もない人々が花火を通

じて喪失から立ち直り死者とともに生きていくようになる過程を描いている作品である。対して、『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない』は、親しい人の死に喪失感を埋められないまま十年が過ぎ、未だ死者に対して罪悪感を抱き後悔しつづけている人々が花火を打ち上げることによって新しく未来へ向かって歩み始めようとする物語である。

小学生のとき「超平和バスターズ」というグループをつくっていつも遊んでいた仲良しの６人だったが、ある日、女の子の一人である〈めんま〉が川に溺れて死んでしまう（以下、アニメのなかの読み方にしたがい、それぞれをあだ名で表記する）。事故の直前、〈めんま〉に対する〈じんたん〉の気持ちを確かめるためにみんなが囃し立て、〈じんたん〉は「誰がこんなブス！」という言葉を〈めんま〉に投げつけてしまう。みんなは明日謝ればいい、と思っていたが、〈めんま〉が川で溺れて死んでしまったことにより、その「明日」は永遠に来なくなる。この事故がきっかけとなり、仲の良かった５人はバラバラになってしまう。

それから月日がたち高校一年生になったある日、〈じんたん〉のもとに、〈めんま〉の幽霊が現れ「願いを叶えてほしい」という。幽霊の姿は〈じんたん〉にしか見えず、しかもその姿は自分と同じように年を重ねて成長していた。〈じんたん〉は第一志望の高校に落ち、他の高校に不本意入学したものの学校に行かなくなり、家に引きこもる生活をしていたが、〈めんま〉の訪れをきっかけとして、かつて仲が良かった幼馴染たちが集まる。５人は〈めんま〉の願いが、花火を打ち上げることだと考える。子供の頃、病気で入院している〈じんたん〉の母親の病気を治してくれるように神様にお願いした手紙を花火で届けようとしたことがあったのだ。そこで花火師の協力を得て、地元の花火である龍勢を打ち上げようとする。

この作品では〈めんま〉の家族とその心情も描かれている。残された三人の家族は〈めんま〉が死んだ時から時間が止まり一緒に暮らしながらも心は離れてしまっていた。特に母親はほとんど家を出ることなく、仏壇に〈めんま〉の写真を置き、好物だったカレーの日にはいつも供える。母親は過去に生きたままであり、もう中学生になった長男にも、幼少の頃のように膝まづいて、両手を肩にかけて話す。そんな母親を見下ろしながら長男は「母ちゃんさあ、俺の身長、何センチか知ってる？　すげえ伸びたんだ、この一年で」とあきれながらいう。

花火を打ち上げる当日、幼馴染だった６人はそれぞれの思いを胸の内にひめて、打ち上げ場所に集まり、打ち上げの準備をする。〈めんま〉の家族３人も花火を見に訪れる。成仏してほしいが、ふたたび別れたくないという思いも抱く〈じんたん〉は、打ち上げをやめるかぎりぎりまで迷いつづけ、やめようとした瞬間、導火線に火がつき龍勢が打ち上がる。

花火を見た後、〈めんま〉を成仏させる花火を見とどけたことにより、〈めんま〉の家族たちの時間はようやくふたたび動き出し、家族３人の生活がはじまるようになる。ただ、花火が打ちあがっても〈めんま〉は成仏して消えることはなかった。〈めんま〉の本当の願いは、花火を打ち上げることではなかったのだ。でも、そのことは、〈めんま〉が〈じんたん〉の前にしか現れないことで、すでに明らかだったのではないかというのが、画面のこちら側でテレビを見ていた筆者の感想である。なぜなら幽霊とは思いを残した人の前に現れるからだ。それぞれは、〈めんま〉とその死に対して後悔を抱いていたが、〈めんま〉自身は思い煩っているわけではなかったからこそ、〈じんたん〉以外のみんなには見えなかったのだ。花火を打ち上げた夜、５人は境内で各々は、必ずしま〈めんま〉のことを考えていたわけではなく、利己的な考えから成仏させようと思っていた胸の内をさらけ出し、そこから物語は一気に佳境へとなだれ込んでいくのであるが、この先は花火と死者の関係を論じようとする本論からはなれるので紹介は控えておくことにしよう。

この作品では、自分たちの手で花火を作るという、龍勢祭りの花火の特徴が非常に巧みに物語のなかに組み込まれている。龍勢という花火は、もともとは農村の人々が自分たちで作る花火である。江戸時代の幕府の政策により、19世紀になると、市中の花火は子供が行う小規模な手遊び品に限られ、大人にとって花火はするものではなく見るものになり、観賞用の大きな花火が発達し、花火の楽しみ方が編成されていった。その一方で農村では花火を自分で製作し実施するという楽しみ方を保ちつづけた[24]。自分たちで花火を作る文化がある秩父市を舞台としていたからこそ、成仏のために花火を作って打ち上げようとする過程を物語の中に組み込むことができ、そして作って打ち上げるまでのそれぞれの衝突や葛藤を描いた作品となったのである。

## おわりに

本稿では、花火と死者の鎮魂の関係について、江戸時代から現代まで、年中行事からテレビアニメまで視野を広げながら検討してきた。検討の結果、通説として広まっている享保年間の悪疫退散と死者鎮魂の花火の打ち上げは、資料的な裏づけがないことをあらためて確認した。

次に、近代において戦死した新政府軍および自国の軍人戦死者を祀る靖国神社や護国神社において例祭日に花火が打ち上げられたこと、日本三大花火大会の一つに数えられる土浦全国花火競技大会が、もともとは1920年代に霞ヶ浦海軍航空隊の殉職者の慰霊のために花火を打ち上げたことを指摘した。これらが軍人の死者を顕彰する意味が込められた花火であることに対して、長岡まつり大花火大会は空襲で死亡した一般市民の犠牲者を慰霊するためにはじめられた花火大会であり、そのシンボルとなっている花火白菊は、花火師・

嘉瀬誠次がシベリア抑留で死んでいった戦友たちの鎮魂のために作られたことを紹介した。

さらに、現代文化における花火と死者を描いた作品として重松清の小説『その日のまえに』とアニメ『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』を検討し、前者は死者の「迎え火」として、後者は幽霊となって現世にいる死者を成仏させるものとして、親しい人を死により失った人々が未来へ向かって歩みはじめる物語を構成する重要な要素として花火が描かれていることを考察した。

本稿では、花火と死者の鎮魂の関係を、できるだけ幅広くとらえようとする立場から、江戸時代から現代までを概観し、靖国神社の例大祭や長岡まつりなどの戦争に関わる祭から、小説やテレビアニメまでを題材として取り上げてきた。近世初期に外国から技術が輸入された花火に死者の鎮魂の思いが託されていく歴史的展開を大づかみにとらえることはできたかもしれないが、その一方より踏みこんだ考察の余地を残しているものも多い。見落としてきた行事や作品も存在するだろう。花火と死者の鎮魂の関係について探求を深めるためには、文献調査とフィールドワークによる資料の収集・検討をさらにつづけ、考察を積み重ねていく必要がある。

**参考文献・引用文献**


1）奥田敦子「隅田川と花火――北斎を出発点として」『東京都江戸東京博物館　調査報告書第28集　隅田川と本所・向島――開発と観光』東京都江戸東京博物館、2014年
2）福澤徹三「近世前期の江戸の花火について」『風俗史学』第56号、2014年、同「近世後期の江戸の花火と幕府政策」『地方史研究』第65巻第３号、2015年
3）『新日本古典文学大系39　方丈記　徒然草』岩波書店、1989年、３ページ
ただし引用に際しては、カタカナをひらがなにあらためた。
4）「台徳院殿御實記　巻23」『国史大系　第38巻』吉川弘文館、1964年、628ページ
5）近世資料研究会編『江戸町触集成　第１巻』塙書房、1994年
6）戸田茂睡「紫の一本」『新編日本古典文学全集　第82巻　近世随想集』小学館、2000年
7）喜田川季荘（守貞）『守貞謾稿』国立国会図書館蔵
8）小勝郷右『花火――火の芸術』岩波新書、1983年、32ページ
9）斎藤月岑、今井金吾校訂『定本武江年表　上』ちくま学芸文庫、2003年、304ページ
10）同書、301ページ
11）校訂を加えた今井金吾は注９の引用箇所につづけて、「五月、幕府全国餓死者慰霊・悪疫退散を兼ね、両国川に於て水神祭を催し、両岸の水茶屋も川施餓鬼を行ふ。これ、いはゆる両国の川開きの始まりとなす。一説に、享保十八年とするもあり」と補っているが（同書、302ページ）、どの資料を根拠に記述したのか不明である。
12）小勝郷右『花火――火の芸術』岩波新書、1983年、37～42ページ
13）同前、51～53ページ

14）斎藤月岑、今井金吾校訂『定本武江年表　下』ちくま学芸文庫、2004年、222ページ
15）高松宮家編『有栖川宮記念厚生資金選奨録　第２輯』高松宮出版、1934年、41～43ページ
16）丸山泰明「殉職と神社」、田中雅一編著『軍隊の文化人類学』風響社、2015年
17）土浦尋常高等小学校編『土浦郷土読本』土浦尋常高等小学校、1940年、81～84ページ
18）内山弘「長岡大花火の歴史」長岡まつり協議会・株式会社文藝春秋編『長岡大花火　祈り』文藝春秋、2006年
19）2015年には、終戦70周年を記念し、長岡市とホノルル市の平和交流事業として８月14日（ホノルル時間、日本時間８月15日）に太平洋戦争終結70周年追悼式典が開催され、それぞれ「米国の戦没者への慰霊」「日本の戦没者への慰霊」「世界の恒久平和」の思いを込めた白菊３発が真珠湾でうちあげられた。８月15日（ホノルル時間、日本時間８月16日）には、平和友好記念式典が開催され、白菊を３発あげたのち、2000発の花火が約20分間打ち上げられた。
20）以下の嘉瀬誠次と白菊の記述については、次の文献を参考にした。「アムールの夜空に咲かせた鎮魂の『華』　花火師・嘉瀬誠次のシベリアへの思い」『アサヒグラフ』通巻3556号、1990年。「聞き語り　嘉瀬誠次物語―還ってきた花火師」長岡まつり協議会・株式会社文藝春秋編『長岡大花火　祈り』文藝春秋、2006年。山崎まゆみ『白菊―伝説の花火師・嘉瀬誠次が捧げた鎮魂の花』小学館、2014年
同前
21）「長岡花火の見方・楽しみ方」長岡まつり協議会・株式会社文藝春秋編『長岡大花火　祈り』文藝春秋、2006年、84ページ。
　この女性――七里アイ氏――は、戦後50年を節目として長らく沈黙してきた空襲の体験を小・中・高の学校をはじめとして、依頼を受けて語る活動をつづけてきた。
22）以下、『その日のまえに』からの引用は2008年に出版された文庫本版からのものである。
23）天童荒太・重松清「命をめぐる話」『オール読物』１月号、2010年
24）福澤徹三『地方紙研究』第65巻第３号、2015年

（まるやま　やすあき　国立公文書館アジア歴史資料センター調査員）